

## ピカソ 青の時代を超えて

ポーラ美術館 22.09.17~23.01.15 ひろしま美術館 23.02.04~05.28



ポーラ美術館開館 20 周年記念として開催される本展は、日本では屈指の「ピカソ・コレクション」を誇る「ポーラ美術館」と「ひろしま美術館」による共同企画で、国内外の重要な作品「約 70 点」が一堂に展示されるだけでなく、最新の科学技術を用いた調査・研究を通して、20 世紀の巨匠「ピカソ」が遺した創造の軌跡に迫るといふ大規模展である。

パブロ・ピカソ 《海辺の母子像》 1902 年 油彩/カンヴァス

画伯が 20 歳時に制作した作品であるが、友人の死をきっかけに「生と死、貧困」といった主題に打ち込み、絵画からは明るくて温かな色彩が消えて、次第に青い闇に覆われてきたという。彼の青の時代の絵画には、純粹さ、静けさ、憂鬱など様々なイメージを惹起する「青=ブルー」が巧みに用いられている。ピカソの「青の時代」の作品は、ほとんど売れることがなく、旺盛な政策意欲を満たしつつ制作活動を進めるために、一度描いたカンヴァスを再利用して、他の構図の絵画に描き替えていたとされる。この作品は、「赤外線反射イメージング分光法」による画像で、表面下の隠れた絵具層を可視化することができ、パリで制作された絵具が乾かない内に新聞紙で表面を覆われ、バルセロナに持ち帰えられた足取りが判明するなど、画家の姿がありありと感じられる。

パブロ・ピカソ 《酒場の二人の女》 1902 年 油彩/カンヴァス



画伯の 20 代前半の作品は、カウンターに置かれた当時爆発的に流行したアブサン（リキュール）のグラスを挟んで、二人の女の背中が揺れている。一見して画中のテキーラを飲む 2 人

の女が、今どんな状態にあるのか推測がつく様子を、絵画化するのがピカソの技法で基本的な態度であるとされる。

この作品も赤外線反射イメージング分析法で得られた調査で、下層に“うずくまる母子像”が描かれていたことが、2005 年に判明(右図)し、他の構図の絵画に書き替えられていたことが判明して大きな話題となった。